

トピックス

イネカメムシはいつ、どのように水田にやってくるのか？

イネカメムシの水田での発生生態には不明なところが多い。本種多発地域で発生調査を行ったところ、稲の出穂の有無に関わらず、地域内で出穂日の早い水田を選好して侵入することが分かった。さらに、最も出穂の早い水田では出穂期に本種が集中的に飛来し、密度が急増することも分かった。

イネカメムシ ～再び増えてきた厄介者～

イネカメムシ(写真1)は、稲の^{もみ}穂を加害(写真2)して斑点米被害(写真3)をもたらすほか、出穂直後の穂を吸汁することで不稔被害(写真4)を引き起こし、多発時には大幅な減収の要因となる。

本種は、過去には稲の重要害虫とされていたが、1960年代以降、水田で見られなくなった。しかし近年、全国的に再び発生が増加している。兵庫県内では、2017年以降発生が確認され、2024年には多くの地域で本種の多発や被害が確認された。



写真1 イネカメムシ成虫(写真左)と幼虫(写真右)



写真2 出穂直後の稲の穂を吸汁する成虫



写真3 イネカメムシの加害による基部斑点米(写真上)と他の斑点米カメムシの加害による斑点米(写真下)



写真4 イネカメムシの吸汁加害による不稔被害(青立ち被害)

謎多きイネカメムシ

これまで、イネカメムシは成虫で越冬し、7月から8月に越冬場所から出穂期の水田へ移動する(写真5)とされてきたが、兵庫県内では、7月に未出穂の水田で本種が多発する事例が確認されている。また、現場からは「数日前はいなかったのに突然大量発生した」、「農薬を散布しても数が減らない」、「特定の水田にだけ現れる」といった情報も寄せられ、本種の水田での発生生態についてはよく分かっていない。

本種の適切な防除タイミングを検討するためには、本種が「いつ、どのように水田にやってくるのか」を明らかにすることが重要である。本稿では、2024年に実施したイネカメムシ多発地域での発生調査について紹介する。



写真5 出穂期の水田で多発した成虫

地域内で移植（＝出穂）が早い水田に集中発生

県内の極早生品種（「コシヒカリ」）と晩生品種（「山田錦」）が混在する地域で、異なる品種や移植日の水田におけるイネカメムシの発生活動を調査した。

移植日の異なる極早生品種（移植日の早いものから順に①、②、③）と晩生品種の各2圃場（表）について、7月上旬から3～7日間隔で水田内の掬い取り調査を行い、水田ごとの成虫数を調査した。

越冬成虫は、7月10日に未出穂の極早生①で初めて発生が確認され、7月下旬までは極早生①と②に集中して発生する傾向が見られた（図）。極早生①では、7月下旬から8月上旬にかけて成虫数の急激な増加が確認され、特に出穂期から穂揃期にかけて顕著であった（図）。そこで、極早生品種に殺虫剤散布を実施したところ、極早生②では成虫数の大きな増加は見られず、極早生③、晩生では成虫発生がほとんど確認されなかった。また、極早生②、③、晩生のいずれの出穂期でも、成虫数の急増は見られなかった（データ略）。

本調査から、越冬成虫は、出穂の有無に関わらず移植日の早い水田を選好して飛来し、地域内で最も早く出穂する水田の出穂期に集中して飛来すると考えられる。出穂の遅い水田の出穂期には集中飛来は見られなかったことから、出穂期に本種が多発する移植の早い水田の防除を徹底することで、地域内の成虫密度を低減できる可能性があると考えられる。

表 調査を実施した水田の移植時期と出穂期

調査区	移植時期	出穂期
極早生①	5月中旬	7月下旬
極早生②	6月上旬	8月上旬
極早生③	6月中旬	8月中旬
晩生	6月中旬	8月下旬

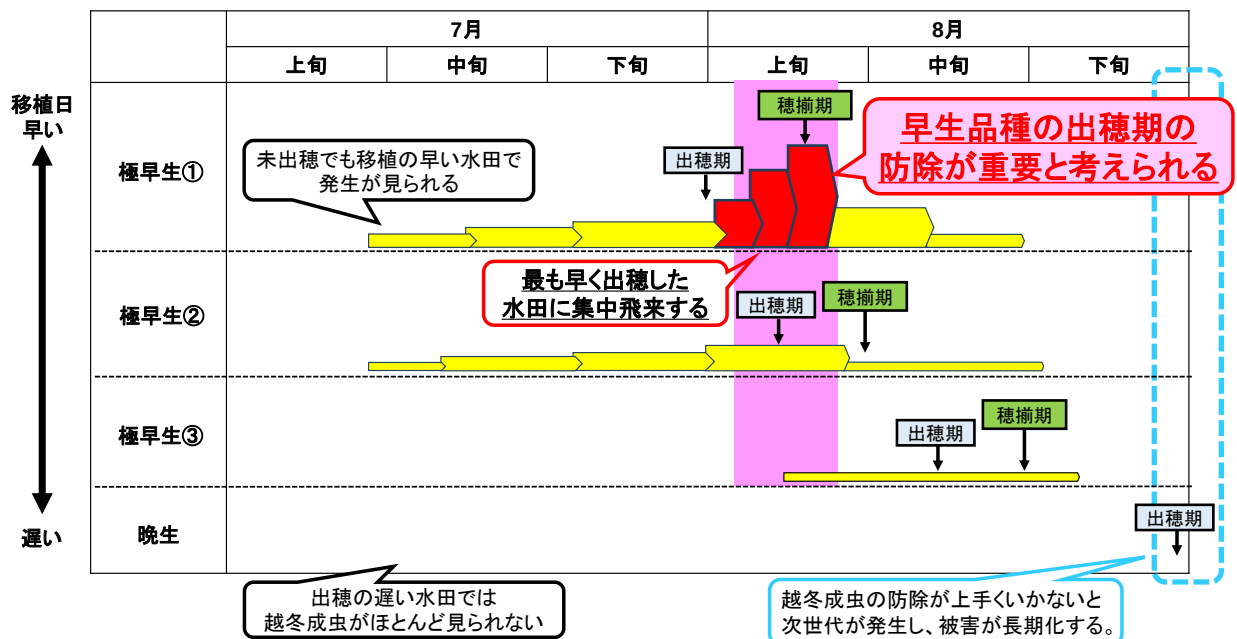


図 本調査を基にしたイネカメムシ越冬成虫の発生イメージ（黄色、赤色は発生程度を示す）

地域で連携した対策を

本調査より、イネカメムシの防除においては、地域内の作付状況を把握し、特に出穂が早い水田での本種の発生状況に注目することが重要である。地域の生産者と関係機関が連携することで、効果的な防除の実施に繋がると期待される。

今後も、研究活動や現地調査を通じて本種の生態を明らかにするとともに、防除対策の早期確立に努めていきたい。

岩橋 祐太（淡路農業部 前 病害虫部）